

国
(問題)
語

2015年度

〈2015 H27092020〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
 - 2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
 - 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
 - 4 マーク解答用紙記入上の注意
- (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
- (2) マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにするなど。
- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

賢明な読者を想定するなら改めて指摘するまでもなかるうが、現代の「情報化」は日本を抜本的に脆弱化させた。

例えば、かつての「黒電話」は、電気が止まっても通話できたが、今はそうではない。電気が止まれば電話線網が全く無傷でも通話できなくなってしまう。かつては通話のために必要な電気は電話線を通して供給されており、電話網は独立したシステムだったのだが、今の電話は、その機能を高度化する見返りに電気が来なければ全く使えない代物になってしまったのである。こうしたシステム間の依存関係は、各種通信や金融、医療等のあらゆる領域にて、情報化の進展の中で様々に進展し、結果、何らかのシステムのわずかな不具合が様々な領域に飛び火し、我々の日常諸活動が抜本的な悪影響を受けることとなったのである。

これと同時に、情報化は、空間的に遠く隔たった人々の間の相互依存を増進させた。ツイッターやフェイスブック等が、いわゆる「砂粒化した孤独な大衆たち」を「つなぎ」あわせ、顔が見えないうちに、彼等の間の精神的な「相互依存関係」を作りあげてしまった。「ネット依存症」という言葉はその現象を端的に表している。つまり情報化は、各種の無機システムの間のみならず、様々な人間、社会システム間の相互依存を増進させたのである。

そして、そうした相互依存の増進が、私たちに巨大な脆弱化をもたらしているのが、現代という時代である。そもそもどんなモノゴトでも、その「依存性」が増え「独立性」が低下すれば脆弱化していかざるを得ない。「依存」している先のものが破壊されれば、その「^aとばっちり」を、依存している側が不可避免的に被るのである。

とは言えもちろん、依存関係があったとしても、依存し合うシステムを含めた「全体」が、「様々な変化に、俊敏、かつ適切に対応できる」のなら、そうした依存関係がある方がより強化される。例えば、私たちの体は、頭から足の先まで、各部位が互いに超高度に依存し合う有機システムであるが、頭脳からの命令一下、身体各部位が互いに協調し合いながら、「走って逃げる」ことも「うずくまる」こともできる。右足だけ頭脳の言うことを聞かず、他の部位が走る動作をしている中で、棒のように何もしないということはない。

つまり私たちの身体は、頭脳による「統治IIガバナンス」が効いているのである。

このことはつまり、かつて独立していたシステム同士が依存し合う格好となったとしても、全体の「統治」があれば「強化」される、ということを示唆している。

しかし、そうした全体の統治が不在のままに相互依存を高めてしまえば、ただ単に「悪影響」を互いに伝達し合うだけとなり、結果、強靱性が損なわれる。だから、情報化¹というものは、統治の有無によって、抜本的な脆弱化か抜本的な強化のいずれかをもたらし得る「諸刃の剣」なのである。

そして残念ながら、私たちの「情報化社会」とはまさに、全体の「統治」が不在のままに、ほぼ無秩序^Aに進展している²のであり、したがって、社会の脆弱化をもたらす文字通りの「悪い」情報化と言わざるを得ないのである。

ここまで情報化が進展してきた今日となつては、ネットもケータイも今更この世から蒸発させることなどできない。だとすれば、この脆弱化した社会を強化せんと考えるのなら「情報化以前に戻る」ことを目指すのではなく、「悪く進展してしまった情報化を、良い情報化に変えていく」ための努力を重ねる以外に方途はないということになる。

かくして我々は、この野放図^bに進展した情報化社会に、適切な「統治IIガバナンス」を導入することが不可欠となるのである。そんな統治さえ存在しているなら、我々は、この情報システムという危険な諸刃の剣を上手に使いこなすことに成功し、その弊害を最小化しつつ、そのメリットを最大化することが可能となるわけである。

なお、情報化社会の統治と言えは、例えば表現の規制等があるが、それは本質的な問題ではない。なぜなら、求められるのは繋げられた各システム/各人「全体」を包み込む「統治」を回復することだからだ。そうした、全体を統括する統治が存在し、その統治の「一部」として各種の「規制」が位置づけられた時に初めて、その規制は強化に資する規制となる。

全体の統治を取り戻すために、「規制」以上に求められる、より本質的な要素は何かと言えは、それは「²より濃密な融合」に他ならない。

そもそも、かつての電話システムは、電話線自身が電話情報と電気の双方を伝達するものであった。つまり、電話シ

システムの中に、電気システムが一体的に埋め込まれていたものであり、かつては電力システムと電話システムが「濃密に融合」していた。ところが、電話の端末の進歩により、そうした微弱な電気では対応できなくなり、「外部」の電力システムから電気をチャウ達するようになってしまった。その結果、電話システムは独立性を失い、脆弱化した。だから、電話システムの強靱化のためには、「電気システムと電話システムの一体的融合」を取り戻すことが必要なのだ。だから例えば電話システムの必要所に、発電装置を埋め込むと同時に、その発電装置を外部の発電システムと一体的に運用することを企図する、等の取り組みが求められよう。

同様に、ネットとケータイでだけ繋がる人々を、より濃密に「融合」させていくことが、人々の強靱化、社会の強靱化のために求められる。大人の常識で言うなら、ネットとケータイでやりとりできる情報量はたかが知れており、相手の物腰や仕草、空気、ましてやその場でしか感得し得ない風土までは伝えようがない。したがって、ネットとケータイだけで繋がる個人同士は、「微弱な融合」をしか達成していない。

こんな状況であるから、双方がさながら家族のように一体化した「チーム」を形成し、何らかの「チームプレー」を果たすことなどできる筈もない。そもそもネットもケータイも電源を切れば、直ぐにその関係を絶つことができるのであるから、人間の手と足のようには c の運命を共有することなど、できるはずもないのである。

だからこそ、お手軽にネットやケータイで繋がることを許すのなら、彼等の間に、ネットやケータイの貧弱な関係性を「従」とし、その「主」となるようなより濃密な関係を形成していく手段を考えない限り、彼等の間に「統治」が芽生えることなどあり得ないのである。

そもそもネット上において繰り返される誹謗中傷や各種のネット犯罪の横行は、参加するユーザーたちの人間関係の希薄性から生ずる。³ 彼等の間に濃密な共有空間があれば、そう易々とそんな誹謗中傷や犯罪が生じるはずもない。例えば顔が互いに見られるバスや電車の中では、そこまでの混沌は発生していないのである。

つまり、濃密な融合、あるいは、それを保証する濃密な共有空間を保証することが、人々の間の「自律的な統治」を喚起する重要な契機となるのである。そうした自律的統治は、「政府による規制」以上に、強力な力を発揮し得る。むしろ、政府による規制は、そうした自律的統治を「サポート」する限りにおいて、強力な力を発揮することができるに過ぎない。

かくして、真つ当な大人は、「電話やネットも結構だが、やはり直接会って話をすることが大切だ」との常識を持っている。そしてその根底にあるのは、人間関係の成立には当事者間の「自律的な統治」（これを礼儀と呼び変えてもいい）が不可欠だという常識があり、そのためには直接顔を合わせた交流が重要なのだという先達から伝えられてきた英知がある。

このことはつまり、「情報の高度化」を進めるのなら、（自律的統治を喚起せしめる）対面の交流を促す「交通／交流の高度化」が必要不可欠なであることを含意している。

あるいは、次のように言うこともできる。

ネットやケータイといった今日の「情報」システムは、人間の「情」を含めた、ありとあらゆる社会活動の実態のごく一面を切り取り、それを遠隔に「報」ずる（知らせる）仕組みだ。そんなごく一面が、受け手側で「意味」を持つのは、送り手と受け手で、その情報の「文脈」が共有されていることが前提であり、そして、その「文脈」を共有するためには「濃密な交流」が先立って存在していることが不可欠なのである。そして、そうした文脈の共有こそ、「統治」の全ての基本なのである。

（藤井聡「交通」を追い抜いた「情報」の弊害）による）

問一 傍線部A、Bに当たる漢字を含むものを、それぞれ次のイ～二の中からそれぞれ一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|
| A | イ | 順序 | □ | 助走 | ハ | 除外 | 二 | 叙述 |
| B | イ | 主張 | □ | 挑発 | ハ | 超越 | 二 | 調律 |

問二 傍線部 a、b の意味を、それぞれ次のイ、二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

a イ 重大な責任を問われることになること。

□ そばにいたために巻き添えになること。

ハ 当然の結果として批判を受けること。

二 予想を超えた高い評価を受けること。

b イ 自然と一体化して目立たないこと。

□ 気が遠くなるほど緩やかなこと。

ハ 計画的なものごとを進めること。

二 勝手気ままにふるまうこと。

問三 傍線部 1「情報化というものは、統治の有無によって、抜本的な脆弱化か抜本的な強靱化のいずれかをもち得る「諸刃の剣」なのである」の説明として、最も適切なものを、次のイ、二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ クセよ。

イ 情報技術による社会の変化は、ネットやケータイといった個人同士が直接的につながる環境の整備によって、情報通信の在り方を根本的にもろく弱くもし、また対極的に強く粘りあるものにもするといった効果と危険性を合わせ持っているということ。

□ 情報技術による社会の変化は、人々の間にそれを共有する文脈や互いの存在への尊重があるかないかによって、その社会を根本的にもろく弱くもし、また対極的に強く粘りあるものにもするといった効果と危険性を合わせ持っているということ。

ハ 情報技術による社会の変化は、砂粒化した孤独な大人たちがリーダーの必要性に気付くか否かによって、その共同性を根本的にもろく弱くもし、また対極的に強く粘りあるものにもするといった効果と危険性を合わせ持っているということ。

二 情報技術による社会の変化は、政府による情報伝達に対する法規制があるかないかによって、人々が自身の思考力を根本的にもろく弱くもし、また対極的に強く粘りあるものにもするといった効果と危険性を合わせ持っているということ。

問四 傍線部 2「より濃密な融合」を著者の文脈に沿って言い換えたものとして、最も適切なものを、次のイ、二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 繰り返される誹謗中傷

□ 人々の間の相互依存

ハ 交通／交流の高度化

二 強靱化に資する規制

問五 空欄 c に当てはまる四字熟語を、イ、二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 徹頭徹尾

□ 粉骨碎身

ハ 一蓮托生

二 呉越同舟

問六 傍線部3「彼等の間に濃密な共有空間があれば、そう易々とそんな誹謗中傷や犯罪が生じるはずもない」の説明として、最も適切なものを、次のイ〜二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 彼等が実際に会って互いの存在を確かめ合う機会を持つことが出来れば、ネットで知り得る以外の深い認識を持つこととなり、たとえネット上で予想外の反応に出くわしても相手をすぐさま批判したり攻撃したりして傷つけるような行動に走ることはない。

ロ 彼等が既存の通信システムに安住することなく新たな通信システムを開発するならば、それまでの情報よりも多くの情報を入力し、ネットの内外を問わず予想外の反応に出くわしても相手をすぐさま批判したり攻撃して傷つけるような行動に走ることはない。

ハ 彼等がネットの特性を熟知して交信し合えば、そこで起こるトラブルの多くは知識の不足や操作ミスから生じることを理解し、たとえネット上などで予想外の反応に出くわしても相手をすぐさま批判したり攻撃して傷つけるような行動に走ることはない。

ニ 彼等がマスメディアの影響を完全に遮断してネットで結ばれた仲間を直視する状態を作ることが出来れば、たとえネット外で互いに関して予想外の反応に出くわしても相手をすぐさま批判したり攻撃して傷つけるような行動に走ることはない。

問七 次の選択肢のうち、筆者の考えに合致するものを、次のイ〜二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ かつての「黒電話」は、電気に依存せずに独自の通信回路を内蔵して緊急時に対応し得たという点において、今日行き詰まりを見せる情報化社会の可能性の象徴であり、砂粒化した人間たちが、電気システムと電話システムの融合から学ぶことは多い。

ロ 情報化社会が今後、何らかの可能性を見出さないとすればそれは、個人同士が情報を交信すると共に、出会い、文脈を共有することで、もろく依存的な関係をより充実した相互理解に満ちた安定的なものへと作りかえて行くという点にある。

ハ 人体における頭脳の統治とは、他の部位を完全に制御しているという点において、情報化社会における自律性ある統治のモデルにはなり得ないが、個人同士の間の「微弱な融合」を「濃密な融合」へと改善する一つのヒントにはなる。

ニ 情報化社会における統治の問題は、統治の主体としての国家が個人の表現の自由に介入して来る危険性があるという点であり、これを回避するための方策は見出されていない。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

英米哲学界では有名なマイケル・ダメット^①の「酋長の踊り」という謎解きがある。ある部族で青年が成人するにはライオン狩り^②でその力を証明せねばならないので、狩り場に二日かけて行き、狩りの後二日かけてもどる。酋長は彼らの成功を祈ってその間踊り続けるが、問題は、狩りが終わった日から青年たちが帰路にある間も踊り続けるというのである。そのとき狩りはすでに終わって事の成否は定まっているのに、その幸運を祈るとはどうしてだ、というのがダメットの問いである。われわれ現代人もこの酋長を笑えないだろう。列車や飛行機の事故の報を聞いた後、それに乗り合わせた家族の無事を祈り、入学試験の合否はすでに決定済みであることを承知しつつ、なお一縷の望みをかけて祈りほしないだろうか。

しかし、すでに決定済みの過去をいまさら変更しようなどとは誰も思っていない。明らかにあの酋長にもわれわれ東京に住む人間にも、過去はまだ決定していない、そして望ましい過去であることを祈る余地、不幸な過去であることを恐れる余地がまだある、こうした思いが心の底にあるのだと私は言いたい。

それはわれわれが堅持していると思っている「決定済みの過去の實在」^③という信念に走った一筋の亀裂ではあるまいか。この信念の底には、現在からは手が届かない「過去自体」という人類に染みついた思いがあると思う。そしてこの「過去自体」という考えこそ、カント^④が徹底的に批判したあの「物自体 (Ding an sich)」の考えそのものか、少なくともその同類近縁のものである。カントの批判に同意する現代の人々は、当然「過去自体」の考えをも批判すべきなのに、これまでそれを怠ってきた。その油断の隙をういてライオン狩りの起こす地震にひとたまりもなく「過去自体」という見かけ倒しの高層ビルに亀裂が入ったのである。ではこのビルを撤去した後どんなバラック^⑤が建てられるのか。

それは私たち人類がその実生活のなかで旧石器のころから営々と実践してきた道を再確認することである。その道の最終段階で「過去自体」や「物自体」の妄想に取りつかれたのだから、この妄想段階をカットしたそこに至る道を確認してそれを再興する、それが私の提案する戦略である。

さて、過去とはどんなことか、過去とはそもそも何なのか、その過去の意味を体験的に教える根幹が想起経験であることを疑う人はいない。想起こそ過去についての唯一の基底的情報源であることは今も昔も変わらない。過去とは想起によつて思い出されるアネクドット^⑥の断片を接続して織つてゆく過去物語りにほかならない。しかし人類はこの情報源が人によつて食い違う、必ずしも信頼できないものであることを痛いほど経験してきたはずである。そこで当然、各人の過去情報をスクリーン^⑦する公定の手続きをあみ出した。その手続きが長年月にわたる生活のなかでの実践的適用によつて修正改善されてきた結果が、現在の法廷や歴史研究、そしてマスコミ報道のなかで社会的に合意され実施されている真理条件として、誰にも十分熟知されている。その基本は、複数の人間の想起の一致 (証言の一致、ウラを取る) と現在世界への整合的接続 (物証や自然法則) である。その具体的内容は裁判所や刑事部屋、それに宇宙論や進化論の学会や教室をのぞけば、そこで毎日展開しているのが見られるだろう。

だがこの真理条件は、最終氷河期の時代の獲物や異性をめぐつての争いや、去年の種まきや収穫についての論争の場で適用されていたものと全く同一の条件であり、その連綿と続行されてきたものである。つまり、過去物語りの真理条件は数学や自然科学の真理条件と同様に歴史的社会的制度なのである。「真理」はア・プリオリ^⑧に天下るのではなく、人間社会の制作物なのである。過去物語りはすべて、家庭争議や犯罪捜査といった些細な事件に至るまでこの真理条件の審査を通過しなければ狭くは当事者たち、広くは社会一般の公認を受けられず、過去として公式の登録をされないものである。過去と呼ばれるものは制度化され公式化された過去物語りであることは、古事記、日本書紀の昔から少しも変わっていない。そしてよくあることだが、こうした制度的なものがあたかもわれわれ人間とは無関係にア・プリオリに実在して、ほんの時折りわれわれにその姿をかいまみさせる、といった錯覚を生むのである。それが物自体とか過去自体といった妄想にほかならない。

過去自体とはカントが強調したように、物自体と同様に経験的には考えることができず、したがって想像することもできない、それゆえただ妄想することができただけのものである。

ありていに言えば、過去とは真理条件に沿って制作される過去物語りにほかならない。

初めに述べたダメットの酋長が、すでに過去になつてライオン狩りの成功をいま祈るのは、過去自体という錯覚のもとでは確かにパラドックス^⑨である。しかし、そのライオン狩りはその時点ではまだ公認された過去物語りにはなっていないのである。つまり、まだ過去ではないのである。だから好意的な酋長が祈っているのは、ライオン狩りの成功が真理条件をパスして、公認公定の過去となつて部族全員に受け入れられることなのである。そこには酋長の善意と好意こそあれ、パラドックスじみたものは何もない。

飛行機事故を知った時点で家族が搭乗していなかった (過去形) ことを願ひ祈るのも、いまさら「後の祭り」を祈るのではなくて、家族非搭乗の過去物語りが公認されて制作されるように願ひ祈るのである。答案を提出した後に、合格

の採点が出る物語りの公式制作をはらはらしながら待つのは受験生すべてだろう。

これらの人間の行動と心理のすべてが指しているのは過去自体という形而上学的妄想ではなくて、過去物語り制作であることは誰の目にも明らかだろう。われわれの表の建前がかりに過去自体であっても、裏の本音は過去制作なのである。机上の形而上学的空論ではなく、実生活での行動と心情は過去制作なのである。

昨日彼から電話があった、と思いつく想起経験で、厳然として有無を言わせぬその電話の実在性を感じるというのも、多くの人の実感であろう。しかしそれは実は錯覚なのである。それは実は、その電話は所定の真理条件をパスして必ず公式の過去物語りに編入されるに違いないという強烈な確信を、過去電話自体という意味不明の妄想で置換したのである。そしてカント以後数百年を経た現在もなお、自然科学者の大部分が信じていると信じている物自体の一変型である素朴实在論についても、平行して言えるのではあるまいか。ここで一つだけは言うことができる。現在形实在論にせよ過去形实在論にせよ、实在論というのはみかけほどには丈夫なものではない。丈夫なのは人間の制作した世界物語りのほうなのである。

(大森莊蔵「後の祭り」を祈る」による)

(注) マイケル・ダメット：イギリスの哲学者（一九二五—二〇一一）。

カント：イマヌエル・カント。ドイツの哲学者（一七二四—一八〇四）。

バラック：間に合わせにつくった仮の家屋。

アネクドット：小話。逸話。

スクリーン：スクリーニング。ふるいわけ。適格審査。

ア・プリオリ：先験的。人間の経験に先立ってあること。

パラドックス：逆説。矛盾することながら同時に成り立つこと。

問八 傍線部1「酋長の踊り」とはどのような行為か。具体例として最も適切なものを、次のイ、二の中から一つ選び、

その解答欄にマークせよ。

イ 好きな野球チームの勝利を願いながら、試合のVTRを見つめる。

ロ 永久機関の実験の成功をのぞみながら、成り行きを観察する。

ハ あらたな化石の発見を夢見ながら、遺跡の発掘作業を行う。

ニ 手術の成功を祈りながら、母親の生還を手術室の外で待つ。

問九 傍線部2「われわれ現代人もこの酋長を笑えない」とはどういうことか。最も適切なものを、次のイ、二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 部族の若者の狩りの成功を祈りつづける酋長と同様、われわれも身内の人間が関わると、常識に疑義を差し挟む余地があると考へてしまいがちである、ということ。

ロ 結果は決まっているはずの狩りの成功を祈る酋長と同様、われわれも科学的には成り立ち得ない信念にもとづいた行動をとることがある、ということ。

ハ 宗教を盲信し、祈りによって狩りの成否を変えようとする酋長と同様、われわれも根拠なく科学的な真理確定の手續きを信じているということ。

ニ 決着のついた狩りについて、部族の若者の成功を信じる酋長と同様、われわれも自分に都合よく記憶を改変してしまいがちである、ということ。

問十 傍線部3「決定済みの過去の實在」という信念に走った「一筋の亀裂」の説明として最も適切なものを、次のイ、二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 人間は、無意識のうちに、科学が万能だという信念に限界を感じていると言うことが、不幸な過去を望ましいものに改変しようとして祈る行為からうかがえるということ。

ロ 旧石器時代以来積み重ねてきた科学の営為の結果、現代のわれわれは、確定的なものと信じられてきた過去を改変することさえ可能になりつつあるということ。

ハ 過去は改変不可能なものだとわれわれは信じているが、本来そのようなものではないことが、過去に望みをかけて祈る行為の内にかいまみられるということ。

ニ 過去は決定的で手を加えないものであり、それを変更しようとする行為は、堅牢な建築物にひびを入れるのと同じように不可能であるということ。

問十一 傍線部4「過去の意味を体験的に教える根幹が想起経験である」とはということか。その説明として最も適切なものを、次のイ〜二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 過去の事実とは、決して「想起する」行為と切り離せず、それゆえ、体験的に理解できない過去にわれわれの理解が届くことはない、ということ。

ロ 過去の事実とは、「想起する」行為によってのみ知られるものであり、それによって得られた情報をつなぎあわせたものとしてある、ということ。

ハ 過去の事実とは、経験とは別個のものであるから、「想起する」行為によってわれわれと関係づけられて初めて意味を持つ、ということ。

ニ 過去の事実とは、経験とは独立に存在するものであっても、「想起する」行為との類推によって、われわれには理解されるということ。

問十二 傍線部5「過去物語りの真理条件」の具体例として、適切な事例を、次のイ〜二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 古代人の生活のあり方を、当時の集落の遺跡の発掘調査によって確かめる。

ロ 研究者の論文作成上の不正行為の有無を本人の証言によって確かめる。

ハ 故人への借金の有無を、残っていた借書の内容によって確かめる。

ニ 容疑者の事件当日のアリバイを知人たちの発言によって確かめる。

問十三 傍線部6「過去自体という錯覚」の説明として最も適切なものを、次のイ〜二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 過去はつねにわれわれの想起体験と切り離せず、それゆえ、つねに誤りをふくむから、信頼に値する純粋な「過去自体」のようなものを考えることはできない、ということ。

ロ どんなに遠い過去であっても現在どこかでつながっているものであるから、われわれの現在の経験をはなれた「過去自体」を追求することには意味がない、ということ。

ハ どんなに確かに見える過去の事実も、特定社会内で公認されたものに過ぎず、相対的なものであって、客観的な「過去自体」なるものは存在し得ない、ということ。

ニ 動かしがたい過去と見えるものも社会一般から公認された一種の物語りであり、そうした営みから独立した「過去自体」なるものは存在しない、ということ。

問十四 この文章で語られていることと合致する内容を次のイ〜ホから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 過去は、人間の語りの営みによって生ずるものであって、その実在性は妄想に過ぎず、したがって、過去について複数の人間が意見の一致を見ることはあり得ない。

ロ 人間は、過去物語りの根柢となる情報断片の内容の食い違いを克服し、過去を公認のものとしていく手段として、さまざまな歴史的社会的制度を發展させてきた。

ハ 妄想に過ぎない「過去自体」という信念を人間が持つのは、強く信じているみずからの経験が他人の記憶とくいちがう可能性への不安を克服するためである。

ニ 過去の出来事の実在性について、想起の際に人間が抱く確信の度合いは、直接体験することによって人間の心の中に刻み込まれた印象の強さによって決まる。

ホ 飛行機事故報道の後、思わず家族の無事を祈る行為からも分かるように、人間は感情や妄想と無縁でなく、それゆえに客観的実在に向き合うことができない。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

歎きながらはかなく過ぎて、秋にもなりぬ。長き思ひの夜もすがら、止むともなききぬたの音、寢屋近ききりぎりすの声の乱れも、一方ならぬ寢覚の催しなれば、壁に背ける灯火の影ばかりを友として、明くるを待つもしづ心なく、尽させぬ涙の雫は、窓打つ雨よりもなり。

いとせめてわび果つる慰みに、誘ふ水だにあらばと、朝夕の言草になりぬるを、その頃、後の親とかの頼むべき理も浅からぬ人しも、遠江とかや、聞くも遙けき道を分けて、都の物語せんとて上り来たるに、何となく細やかなる物語などするついでに、「かくてつくづくとおはせんよりは、田舎の住まひも見つつ慰み給へかし。かしこも物騒がしくもあらず、心澄まさん人は見ぬべきさまなる」など、なほざりなく誘へど、さすがにひたみちにふり離れなむ都の名残も、いづくを偲ぶ心にか、心細く思ひわづらはるれど、あらぬ住まひに身を変へたと思ひなしてとだに、憂きを忘るるたよりもやと、あやなく思ひ立ちぬ。

下るべき日にもなりぬ。夜深く都を出でなんとするに、頃は神無月の 1 ならば、有明の光もいと心細く、風の音もすさまじく、身にしみ通る心地するに、人は皆起き騒げど、人知れず心ばかりには、さてもいかにさすらふる身の行方にかと、ただ今になりては心細きことのみ多かれど、さりとして留まるべきにもあらねば、出でぬる道すがら、先づかきくらす涙のみ先に立ちて、心細く悲しきことぞ、何に 2 とも覚えぬ。

(中略)

落ち着き所のさまを見れば、ここかしこに 2 すぐおろかなる家居どもの中には、同じ茅屋どもなど、さすがに狭からねど、はかなげなる葦ばかりにて結びおける隔てども、かけとまるべくもあらずかりそめなれど、げに「宮も藁屋も 2」と思ふには、かくてしもなかなかにもあらぬさまなり。後は松原にて、前には大きな川のどかに流れたり。海いと近ければ、湊の波こともに聞えて、潮のさす時は、この川の水逆様に流るるやうに見ゆるなど、様変りていとをかしきさまなれど、いかなるにか、心留まらず、日数経るままに都の方のみ恋しく、昼はひめもすに眺め、夜は夜すがら物をのみ思ひ続ける。荒磯の波の音も、枕の下に落ち来る響きには、心ならずも夢の通ひ路絶え果てぬべし。

心からかかる旅寝に歎くとも夢だに許せ沖つ白波 3

富士の山は、ただこもにとぞ見ゆる。雪いと白くて、風になびく煙の末も夢の前にあはれなれど、「上なきものは 4」と思ひ消つ心のたけぞ、もの恐ろしかりける。甲斐の白根も、いと白く見渡されたり。

かくて霜月の末つ方にもなりぬ。都の方よりも文どものあまたあるを見れば、いと幼くより育みし人、はかなくも見捨てられて、心細かりつる思ひに病になりて、限りになりたる由を鳥の跡のやうに書き続けておこせたるを見るに、あはれに悲しくて、よろづを忘れて急ぎ上りなんとするは、人の思ふらんことどもの騒がしく 3、とにかくに障るべき心地もせねば、にはかに急ぎ発つを、「道もいと凍り閉ちて、障りがちにあやふかるべきを、ただ今はかばかりしくうち添ふ人もなくて」など、さまざま留むる人も多かりければ、思ひわびてねのみ泣かるるを、見る人も心苦しくとて、供すべき者どもなどこれかれと定めて、上るべきになりぬ。

(「うたたね」による)

(注一) 蟬丸の歌「世の中はとてもかくても同じこと宮も藁屋も果てしなれば」を踏まえる。

(注二) 藤原家隆の歌「富士の嶺の煙もなほぞ立ちのぼる上なきものは思ひなりけり」を踏まえる。

問十五 傍線部1「誘ふ水だにあらば」は小野小町の歌「わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」を踏まえた表現である。傍線部1の中の「誘ふ水」は、続く本文の中で、何に該当すると考えられるか。最も

適切なものを次のイ、ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 求愛する人 口 転居を勧める人

ハ 物語でに同行する人 ニ 風情ある暁の出立

ホ 風光明媚な田舎の暮らし

問十六 空欄 1 に入る語として、最も適切なものを次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。
イ 一日 ☐ 三日 ☐ ハ 十日余り ☐ 二十五日 ☐ ホ 二十日余り ☐

問十七 空欄 2 に入る語として、最も適切なものを次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。
イ たとふべし ☐ たとふまじ ☐ ハ たとへけん ☐ ニ たとふらむ ☐ ホ たとへさす ☐

問十八 傍線部2「すぐくおろかなる家居どもの中には」の意味として、最も適切なものを次のイ〜ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。
イ たいへん教養に乏しい人の家々の中には
ロ すばらしく簡潔な作りの家々の中には
ハ 古めかしい、貧しい人の家々の中には
ニ 気味悪い、粗末な家々の中には

問十九 傍線部3「夢だに許せ沖つ白波」は、どのようなことを歌っているか。最も適切なものを次のイ〜ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 沖の白波に対して、波音で都の夢から目覚めさせないで欲しいと訴えている。
ロ 沖の白波を果てしなく続く苦しい旅路に喩え、夢の中では嘆きたくないと願っている。
ハ 沖の白波に対して、眠れない日が続いているので、静かに寝かせて欲しいと訴えている。
ニ 沖の白波を都に帰ることへの障壁に喩え、夢の中まで出てこないで欲しいと願っている。

問二十 傍線部4「思ひ消つ心のたけぞ、もの恐ろしかりける」に用いられた文章技法として、最も適切なものを次のイ〜ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。
イ 対句 ☐ 縁語 ☐ ハ 本歌取り ☐ ニ 押韻 ☐

問二十一 空欄 3 に入る語として、最も適切なものを次のイ〜ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ さうざうしけれど ☐ つきづきしけれど ☐ ハ かたはらいたけれど ☐ ニ ゆかしけれど ☐

問二十二 本作品は阿仏尼の作と考えられている。他に阿仏尼の作品とされるものを次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 無名抄 ☐ 海道記 ☐ ハ とはすがたり ☐ ニ 東関紀行 ☐ ホ 十六夜日記 ☐

問二十三 問題文『うたたね』の描写の一部は次に挙げる白居易の詩句Ⅰ、Ⅱに基づいている。これを読んであとの(1)の問いに答えよ(返り点、送り仮名を省いた部分がある)。

Ⅰ

誰^ガ家^ノ思^カ婦^ニ秋^ニ擣^{ウツ}帛^ヲし
月^{キエ}苦^ク風^フ凄^シ砧^{チン}杵^{シヨ}悲^シひ
八月九月正^ニ長^キ夜^キ上^ヘ
① 千声万声無了時^ビ

Ⅱ

秋夜長^シ
夜長^{クシテ}無^ク寐^{イぬル}天不^レ明^ケ
耿^{かう}耿^{かう}残^{タル}燈^{タル}背^ツ壁^ヲ影^ヲ
蕭蕭^{タル}暗^{タル}雨^{タル}打^ツ窓^ヲ声^ヲ

(1) 傍線部①の書き下し文は「千声万声了む時無し」となる。これに基づいて原文に返り点を打った場合、最も適切なものを次のイ、ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 千声万声無了^レ時
ロ 千声万声無了^レ時
ハ 千声万声無了^二時^一
ニ 千声万声無了^下了^上時
ホ 千声万声無了^下了^上時

問二十四 問題文『うたたね』の中で、Ⅰ、Ⅱの詩句に基づいた描写として最も適切と考えられるものを次のイ、ニの中からそれぞれ一つずつ選び、その解答欄にマークせよ。

Ⅰ

イ 長き思ひの夜もすがら、止むともなききぬたの音
ロ さすがにひたみちにふり離れなむ都の名残も
ハ 荒磯の波の音も、枕の下に落ち来る響きには
ニ 心ならずも夢の通ひ路絶え果てぬべし

Ⅱ

イ 寝屋近ききりぎりすの声の乱れも
ロ 尽きせぬ涙の雫は、窓打つ雨よりもなり
ハ 有明の光もいと心細く、風の音もすさまじく
ニ 涙のみ先に立ちて、心細く悲しきことぞ

問二十五 問題文『うたたね』およびⅠ、Ⅱの詩句の三者に共通する情感として該当しないものを次のイ、ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ ものうい ロ わびしい ハ 寒々しい ニ 情けない ホ 痛ましい

〔以下余白〕